

2022. 11. 6. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書10章38～42節
『必要なことはただ一つだけ』

本日の聖書の箇所は「マルタとマリア」という小標題のもとに始まる物語です。記事によりますと、イエス一行を家に招き入れたのはマルタであったと記されます。ルカはその家庭事情を詳細に説明は致しませんが、姉妹であるマリアの態度にマルタが憤慨した様子から推察すると、余りある使用人を抱えていたようには見受けられません。また、マルタとマリアがよく相談し、準備万端の上でイエス一行のもてなしが始まったわけでもなさそうです。おそらくこの姉妹たちの間では、それまでもそうであったように、今度もまたマルタが突拍子もなく突然にイエス一行を引き入れたという、いつもの懲りない風景だったのでしょう。

この物語は通常、キリストの愛の御言葉を聞く仕え方と奉仕による仕え方を教え、前者を優先させよと解釈されます。はたしてルカはそのような道徳を説くためにこの記事をあえて著したのでしょうか。イエス一行をまずもてなそうとしたマルタは、何もしないでただイエスの話を聞いているだけのマリアより悪者なのでしょうか。

実は当時からこういった「誤解」はあったのです。ルカは曲解を避けるためマルタに「主よ」(40)と呼び掛けさせます。この言葉は単に「預言者」を指す用語ではなく、「復活の主」(キュリオス)という初代教会とキリストとの正統な関係性、つまり福音に生きている者のみが使う言葉なのです。その呼び掛けに応えて「主は」(41)という語も同じキュリオスが使われます。このことはマルタの行為が初代教会の大切な行いであったことを意味します。

これらマルタの一連の行為は「もてなし」(ディアコニア)と翻訳されていますが、「仕える」という意味です。それは「仕える」という働きかけが初代教会の福音理解の中軸であったことを意味します。マルタは正しいのです。

しかし、ここでイエスはそんなマルタを一語一語噛み砕くように柔らかく諷め

ます(41)。なぜなのでしょう。

それは「仕える」という行為が他者のためではなく、自分自身のこころの垣根の取り払いにこそ目的があるからなのです。

この物語はマルタとマリアの二者択一の物語ではありません。そうではなく、初代教会の弱く・小さく・貧しい人々への連綿たる奉仕作業のただ中で、やがて自らの内に復活の主に傾聴する自分を見出す福音への道程が示されていくのです。だから二人が姉妹である設定とは、別個の人格の問題の取り扱いではなく、一つのパーソナリティーの内に信仰が形成されて行くプロセスを描いた初代教会の経験的教育的プログラムなのでしょう。

喜びのある「仕え」を得ずして信仰はないということなのです。これがただ一つの「必要なこと」なのです。

本日は召天者記念礼拝です。天上へと召された愛する者たちはマルタだったのかマリヤだったのかと思ひ返す必要などありません。自分は愛されている存在なのだという喜びを原点にしてわたしたちと出会った方々だったのでしょ。そして必ずやその喜びはキリストの贖罪にいつも立ち返ることによって日々新しくされる喜びに違いなかったし、その喜びを胸にわたしたちは出会いを持てたことに感謝したいと思うのです。そして今もその愛する者を通してわたしたちには「必要なことはただ一つ」と語りかけられるのです。